

て人間の正道にあらず、人間元來生を受し、存を樂む、人道之れに始まり、榮ゆるを願ひ、達するを好む、人道之れに中し、美名を欲し、徳化を尊ぶ、人道や茲に終る、實に始めあり終りある者は其れ唯人道か、

人道の源流を究むる者は心理學なり、人道の範圍を定むる者は社會學なり、人道の進路を示すものは倫理學なり、人道の行動を守る者は國法學なり、人道の保存を量る者は教育學なり、人道の實利を修むる者は經濟學なり、人道の正邪を正す者は法理學なり、人道の根源を教ふる者は人類學なり、人道の眞偽を判する者は哲學なり、國史は之れに生命を與へ、國風は之れに活動を與ふ、人道豈に至れる哉、世人よ誤解する勿れ、余か無神論を説き、無宗教論を主張するの故を以て、無精神論者なり、無靈魂論者なりと、余か所謂人道には大精神あり、余か所謂人道には大靈魂あり、是の大精神ありて能く世

界億萬の人を結べり、是の大靈魂ありて能く人類出現以來十二萬年餘の生命を保持して巧に活動し來たれり、

道とは通ずるの義なり、彼我相接し、自他相交るの義なり、人間元來社交的群居的動物なり、家族をなし、村落をなし、國家をなし、社會をなし、言語ありて自他の精神を通じ、文字ありて古今靈魂を保持し、以て能く相知り、相愛じ、相教け、相結ぶ、精神能く東西を化し、靈魂能く古今を結ぶ、萬民共存の大義は之れ人道の精神にして、自他相利するの大徳は之れ人道の靈魂なり、生々相懸きて止まざる世界億萬の大衆は之れ人道の身体なり、盛んなる哉、人道、偉なる哉、人道、之れを信じ之れを行ふものは榮え、之れを無視し之れを行はざるものは亡ぶ、人道豈に的然なる哉、

日月は明の至れるものなり、雷霆は音の至れるものなり

り、海は水の至れるもの、山は土の至れるもの、人道はを
 れ徳の至れるものか、是れを以て其大外なく、其小内な
 し、且々として通じ易きは、大道なり、易々として知り易
 きは人道なり、風雲明闇あるものは天なり、草木山川あ
 るものは地なり、大我小我あるものは人なり、大徳小徳
 あるものは道なり、大我能く衆を益し、是れを以て大徳
 たり、小我能く己れを利す、是れを以て小徳たり、我が心
 我が身、我が父、我が母、我が妻、我が子、我が家、我が村、我が
 郡、我が縣、我が國、我が君、我が祖、我が地、我が物、是れ我れ
 の活動なり、之れ我れの種類なり、大我より見れば父我れに非
 ば國も我れに非ず、唯我れののみ我れたり、
 予子我れに非ず、唯我れののみ我れたり、
 以て西すべく以て東すべきは大道なり、以て大を利す
 べく以て小を益すべきは人道なり、大小兩立する能は
 ずんば大を採りて小を去らんか、手能く我れの爲めに

利刀を取りて之れを守る、其甚しきに至つては切害せ
 らるゝを辭せず、足能く我れの爲めに百里を歩して其
 心を得せしむ、其甚しきに至りては肉破れて血の流る
 ゝを辭せず、手足の我れに忠なる其れ至れる哉、手足不
 幸にして之れを斷つと雖ども或は猶は能く我れある
 を得ん、而も安んず我れ亡して手足獨り存するを得んや
 之れを以て我れは本なり、手足は末なり、我れは大なり
 手足は小なり、不幸にして大小兩立するあたはずんば
 我れは大を存して小を亡せん、
 大我小我如何に論無く總て之れ等は時空の間に活動
 す、是の故に我れの大小を知らんとせば時空に於ける
 我れの活動の内容を知らざるへからず、例へば大我の
 一たる日本帝國は時間を要せし事既に三千年、空間を
 要せし事由來千里、其間四千餘萬の少我を生々存々相
 利せしめて止まず、之れ大我の大我たる所以か、

大我能く小我を保育す、國は縣を治め、縣は郡を治め、郡は村を治め、村は家を治め、家は人を治む、父は子を治め、子は孫を治む、治むとは保護するなり、利益するなり、故に小我能く大我に事ふれば安全たるべし、父の子を治むるを慈育と云ひ、子の父に事ふるを孝順と云ふ、君の臣を治むるを慈仁と謂ひ、臣の君に事ふるを忠義と謂ふ、夫の妻を治むるを慈愛と謂ひ、妻の夫に事ふるを愛敬と謂ふ、長者の幼者を治むるを慈悲と謂ひ、幼者の長者に事ふるを尊敬と謂ふ、故に慈育と謂ひ、慈仁と謂ひ、慈愛と謂ひ、慈悲と謂ひ、忠義と謂ひ、愛敬と謂ひ、尊敬と謂ふは之れ皆小我の大我に接するの義なり、男女は同權なり然れども夫婦は同權にあらず、男女と夫婦とは別なり、男女は自然の人なり、夫婦は法人なり、男女は去來自由なり、夫婦は去來契約あり、男女は個々

の二人なり、獨立獨行なり、夫婦は組合の一体なり、整然一我の命に行動せざるへからず、男主權にあらずんば女主權たるを要す、一体に二個の頭腦なきが如く、一家に又二個の主權あるをゆるぎず、夫主人たるにあらずんば婦主人たるを要す、是の故に夫婦は同權にあらず以上論する所は人道の大要なり、それ唯人道の大要なり、是れを以て無神論なり、無宗教論なり、何んとなれば有神論は神道なり、人道にあらず、宗教は空想なり、妄念なり、不可知なり、死滅なり、非國家主義なり、僞屈なり、之れ終に人道にあらず、余は譬喻として神佛の存在を認め、余は古物として宗教の存在を認め、余は神佛を信せず、理法を信す、余は宗教を信頼せず、人道を信頼す、余は唯善は善なるの故に尊はず、惡は惡なるの故に去らず、已れを益し人を利するを善として之れを尊び、已れを害し人を害するを惡

として之れを去る、大我小我兩立する能はざる時は小
 我を亡して大我の存するを勉む、是れ余が人道大觀な
 り、譬喩にあらす、理論なり、空想にあらす、實在なり、文章
 拙にして短しと雖ども、題や重く、意や廣し、之れを以て
 始め寸分の差は後に尺丈の別を生せん、之れ余のひそ
 かに憂ふる所なり、
 余は先きに靈魂は不滅なりと謂へり、然り靈魂は全く
 不滅なり、何を以て之れを謂ふか、曰く理法の不滅之れ
 なり、曰く勢力の永存之れなり、曰く人道の大衆を結び
 て百代千世生々存々して止まざる之れなり、靈魂に大
 我の靈あり、小我の靈あり、天の靈あり、地の靈あり、日月
 運行して時をあやまたず、風雲去來して寒暑たがはず
 星辰羅在してやどらざるは天の靈なり、山は高く時に
 火を吹き岩を雨らす、川は千古に流れて破壊と運搬と
 沈没との三作用相繼ぎて止まらず、草木茲に生々して花

あり實あるは之れ地の靈なり、國家永年の大計をめぐ
 らして萬民茲に安寧なるは大我の靈なり、猫は猫たり
 犬は犬たり、馬能く馬を産し、牛能く牛を生じ、人も亦五
 尺の体を利して五十年の活動をなすは之れ小我の靈
 なり、
 生死とは何ぞや、一靈去りて一靈來たるの故なり、去る
 と雖ども滅するにあらず、來ると雖ども層すにあらず
 宇宙の大我より之れを見れば、物質は不滅にして勢力
 は恒存なり、一氷解けて水となり、水蒸して氣となり、氣
 凝りて雲となり、雲結びて雨となり、雨下りて川とな
 り、泉となり、海となり、又寒じて氷となる、其間形態萬變
 すと雖ども水其物の物質は依然として層滅ある事な
 し、水は冷なり、凝りて氷となり、氷は寒に依りて氷の靈を保ち、水
 蒸氣は熱に依りて水蒸氣の靈を保ち、水は温にまゝりて

其液体の靈を保つ、是の故に氷、温に接して解けて水と
なる時は氷の靈去りて水の靈來たるなり、水熱して氣
となる時は水の靈去りて氣の靈來たるなり、氣、冷に接
して液となる時は氣の靈去りて液の靈來るなり、氷死
すと雖も水は生れり、水死すと雖も氣生れり、氣體
液体、固体、寒温熱に依りて其体變ずと雖も其物質と
其勢力とは依然として屑減なき事是の如し、靈とは何
ぞや是れ物質の勢力なり、
夫れ勢力あれば必ず茲に物質無くんばならず、物質あ
れば必ず茲に勢力無くんばならず、物質と勢力とは元
來分難して存する事能はず、物質は先きなるか勢力は
先きなるか、物質は主なるか勢力は主なるか、問ふを止
めよ、靈無くして身あるを得るか、身無くして靈あるを
得るか、靈無くして身結び、身能く靈を乗す、是の故に靈無
くして身なく、身なくして靈なし、身靈は之れ一体にし

て二面なり、表裏なり、物質と勢力と之れ宇宙の二大屬
性に於て、物靈二元の本体を大我と謂ふ、大我能く物靈
二元を統一す宇宙の大我は其比對を絶し、其大外無く
其微内なし、宇宙全体森羅萬象揮ふて大我の師尊に依
らざるものなし、
梅の花は梅の花なり、櫻の花は櫻の花なり、人の子人に
して馬の子馬たり、小我の積集之れ決して大我たる能
はず然らば大我は如何にして之れを知るを得るか、大
我は世界に通じて之れあり、宇宙に潜みて之れあり、天
は之れ大我の一にして、地は又之れ大我の一なり、天
大我より見れば天地一なり、萬物一なり、人獸一なり、物
心一なり、大我開きて天地となり、萬物となり、人獸とな
り、物心となる、大我は平等律の太極にして、小我は差別
律の大極なり、大我は宇宙の實相本体にして、小我は宇
宙の世相現象なり、大我は宇宙の實相本体にして平等

律の大極なるが故に不性不滅なり、不層不滅なり、寂然不動の定体なり、眼に見るへきの体なく、耳に聞くへきの聲なく、口に味ふべく甘なしと雖ども、萬古に通して物心二元を統一して、人獸萬物を生々存々死々滅々せしめて止まず、妙の又妙にして玄の又玄なるものなり夫れ小我は之れに反して宇宙の世相現象にして、差別律の大極なるが故に、生死無常なり、一層一滅、日夜變々化々して止まず、盛衰花の如く、榮枯草に似たり、千狀萬態、變動量るへからず、明闇美醜、眼を翳ろかし、善言惡語耳をさやがし、辛酸甘苦口をいそがしむ、是の如く分秒能を化し、寸尺量を變せしむるが故に、物に美醜と大小を生じ、心に好惡と得失を産み、自他茲に於てか欲を戰はし、彼我れ茲に於てか財を争ふ、又止むを得ざるに出づ、

大我を以て水に例ふれば小我は之れ波なり、水は本体

なり、波は現象なり、水は平等なり、波は差別なり、水は實相なり、波は世相なり、水は定体なり、波は變体なり、其れ水は元來波を爲すの性ありと雖ども、未だ水のみにては波を爲す能はず、風之れに加はらざるへからず水あり風あり茲に始めて波たるを得るなり、水は之れ大我なり本体なり實相なり平等なり通我なり定体なりとせば、〇は無論小我なり現象なり世相なり差別なり別我なり變体なる事は先きにも譬喩したるが如し然らば風は水を動して波たらしむるの勢力なれば之れを何んぞ稱して可なるか、

思ふに大我が分化して小我となり、本体が開發して現象となり、實相が具体して世相となり、平等が區別されて差別となり、通我が獨立して別我となり、定体が運動して變体となるには、大我が自ら分化するか、本体が自ら開發するか、實相が自ら體現するか、平等が自ら區別

するか、通我が自ら獨立するか、定体が自ら運動するか、詳言すれば、是れ等自動を以て然るか、他動を以て然るか、若し自動を以て然りとせば大我自ら分化して小我となるの力ありと云はざるへからず、若し又他動なりとせば何者か大我以外にありて、大我に命じて小我たりしむる事となるなり、

余は斷して前者を採用せん、何んとなれば大我以外に何者かありとせば大我以外に大我ある事となり、本體以外に本體ある事となり、本體は絶對なり、實相は唯一なり、然るに大我以外に大我あり本體以外に本體あり、實相以外に實相ありとせば、無限以外に無限あり、絶對以外に絶對あり、唯一以外に唯一ありと云ふ事となる、之に何等の不論理予や、之れ何等の矛盾予や、余は斷して云ふ大我自ら分化し、本體自ら開發、し實相自ら體現するものなりと、所謂大我は能生なり、

り、本體は自動なり、實相は靈活なりと云ふなり、大我は能生なりと雖ども妄りに小我を分化する事能はず、本體は自動なりと雖ども妄りに現象を開發する事能はず、實相は靈活なりと雖ども妄りに體現して世相となる事能はず、茲に習慣律分毛も犯すへからざるものありて存す、

習慣律とは何予や、運動の方向なり、勢力の形式なり、理想の範疇なり、時空の定律なり、柿の種には柿の樹を生し、栗の實には栗の樹を生し、蛙の子は蛙にして、鯨の子は鯨たるは是れ皆習慣律のしからしむる處なり、大我は渾沌たるものにあらず、實相は死滅せるものにあらず、本體は亂雜なるものにあらず、定體は枯死せるものにあらず、通我は不規則なるものにあらず、平等は統一無きものにあらず、死滅や、亂雜や、枯死や、不規則や、統一無きものや、混沌たるものや之れ決して靈魂あり

精神ある者の知らざる所爲ざる所なり、
 今夫れ死人の足を斷ちて之れを頭部に置き、頭を斷ち
 て之れを足部に置かば、一大滑稽の畫題を得ん、自由自
 在にして愚俗の所謂魔法、宗教の所謂奇蹟や神道に類
 したるものありと雖も之れ混沌なり、死滅なり、亂雜
 なり、枯死なり、不規則なり、統一なり、靈々たる活人にし
 て其頭を切り其足を斷たば則ち如何ん、活人元來不能
 なるもの多し活物元來習慣律に従はざるへからず是
 を以て能く活人たり、能く活物たるを得るなり、
 不能に二種あり、一を先天的不能と云ひ、一を後天的不
 能と云ふ、前者は所謂大我の不能にして、習慣律之れな
 り、後者は所謂小我の不能にして遺傳性之れなり、一物
 が同時に異所に在る事能はず、二物が同時に同處に在
 る事能はず、一心が同時に二物を思ふ事能はず、一靈が
 同時に二体を理する事能はず、一物が同時に全部表

面たる事あたはず、昔を今にし今を昔にする事あたはず、
 以上を先天的の不能と云ひ、虎を變して猫となし、犬
 を化して鹿となし、梅を變して竹となし、松を化して菊
 となす事あたはざるは之れ後天的の不能なり
 習慣律は大我をして小我を産せしむ、されど大我を去
 りて習慣律ある事なし、大我と習慣律とは一体なり、大
 我は至高の本体にして、一度動きて習慣律を生じ、習慣
 律は東西上下に分派流通して茲に萬物を開く、萬物茲
 に開きて互に相利し、相害し、相與へ、相奪ふ、
 鼠は蠶を害し、猫は鼠を害し、犬は猫を害し、狼は犬を害
 し、熊は狼を害し、虎は熊を害し、獅子は虎を害し、小虫獅
 子の身中に潜みて能く之れを害す、吁百獸の大王終に
 無名の小虫に害せらるなり、
 天大洋を照じて雲を得べし、雲結びて雨をなすべし、雨
 下りて草木を繁茂せしむべし、青草は牛馬羊豕を育し

樹木は猿類百禽茲に住み、茲に食ふ、萬物相利し相害し相與へ、相害ふ事是の如し、之れ天道なり自然なり、天道は是に非ず、非に非ず、善に非ず、惡に非ず、正に非ず、邪に非らず、是非、善惡、正邪は人道を以て論ずべくも、未だ天道を以て論すへからず、天道は嚴として存す之れ真なり偽に非らず、之れ實なり虚に非らず、之れ力なり名に非らず、故に天道を利する者は榮え、天道に従ふ者は日に新に、天道を守る者は能く保つべし、茲に於てか萬物進化論起る、進化論とは何予や、天道萬物を生して之れを利し、之れを害せしむ、是に於てか萬物相互に自ら守る、然らずんば互に相戦ふ、之れを生存競争と謂ひ、之れを自然淘汰と謂ひ、之れを適種保存と謂ひ、之れを順應類化と云ふ白雪皚々の地に産する熊は白く、森林闇黒の内に居る熊は黒く、滿目褐色を呈する砂漠の混蟲は褐色を帯ぶ

る者多く、フクラスマムラサキテウの仔蟲が木葉の筋と撰ぶ所なく、ユフガホベツトウの仔蟲が「オウトリトマラズ」の果實に似たる、「カリマテウ」が枯葉をおざむく、「シヤクトリム」が巧に木枝を學ぶ、雨蛙の青草の色に似たるものあれば、木幹の色に似たるものあり、其他猿類の知に豊かなる、獅子虎の瓜牙の利なる、猫の耳、犬の鼻、牛の角馬の足、象の鼻、蜂の螫、狐の尻、「カンガール」の尾、鳥の翼、魚の鱗、鷹の目、孔雀の羽毛、鶯の美聲、等皆之れ天與の武器にして、自ら守るの兵に非らずんば、味方を兼ねぎ妻をよろこばせ子を育するの器たらずんば、天道至れる哉、大我仁なる哉、天道至れりと雖とも自ら爲さず、大我仁なりと雖とも自ら施さず、天道は無意にして行はれ、大我は無心にして至る、自然の大法は無意識なり、天道の大靈は不滅不生なり、只だ自ら爲す者を爲す、只だ自ら存する者を存

す、只だ自ら強する者を強す、力則ち之れ正は天道の本
分なり何等迷信の來たるを容れず、天道は禮拜する者
の爲めには私しせず、天道は信仰する者の爲めに曲け
ず、天道は誦望する者の爲めに來らず、天道は畏敬する
者の爲めに至らず、勉め行ふ者の爲めに仁たり、學び利
する者の爲めに富たり、守り安んずる者の爲めに孝た
り、
人道は我れ既に之れを説きたり、天道も亦既に之れを
説きたり、之れより國法に就きて一言せん、國法は國民
の生を委ね、産を安んじ、業を得、族を養ふ道なり、生を委
ぬるが故に一日も欠くへからず、産を安んずるか故に
法令や嚴ならざるへからず、業を得るか故に萬民や和
さゝるへからず、族を養ふか故に血族や結ばざるへか
らず、

大地の上、二界、三帯、四地、五處あり、二界とは陸と海とな

り、三帯とは寒と温と熱となり、四地とは瘠と饒と乾と
濕となり、五處とは山と河と原と村と町となり、大陸の
人や寛なり、海邊の人や敏なり、寒帯の人や忍にして愚
なり、温帯の人や急にして知なり、熱帯の人や猛にして
情なり、瘠地の人や好なり、饒地の人や誇なり、乾地の人
や快活なり、濕地の人や陰鬱なり、山に居る人は其俗質
朴なり、河に處る人は其俗輕薄なり、原に處る人は其俗
寛平なり、村に處る人は其俗誠實なり、町に處る人は其
俗薄情なり、
世界萬國人相同じと雖とも、國風人情の別を生ずる事
又天道の爲す所なり、英國人の實行的なる、獨乙人の思
辨的なる、佛國人の虚飾的なる、支那人の寛大無頓着な
る、日本人の狭量輕卒なる、皆な之れ地味、地勢、氣候、風土
のしからしむる所、天道と人道と國法と一貫する所又
之れにあり、

國風は客觀的に國民を化し、人情は主觀的に國民を制す、國風と人情と相和合して國法生ず、是の故に國民に順應せざる國法は民を害し、人情に類化せざる國法は民を毒す、天道と人道と國法とは宗教家、教育家、政事家之れを知らずんばあらず、

附言

余は今茲に人道を論じ、世法を談じ、神佛を評し、宗教を罵す等多く讀者を勞したり、余は人の爲めに神佛宗教の存在を認む、されど我が爲めに之れを信せず、今の世に於て神佛宗教を信するは、古昔佛教に於て小乗教を信せしか如し、之れ方便教なり、宇宙の眞理、人情の極致に別に根本の信仰あり、讀者よ誤解する勿れ、我れ今茲に無神論無宗教論を説くと雖ども、我が國體の神髓たる祖先崇拜の儀禮我れ

之れを無視せず、是は宗教にあらず、哲學上、國家學上、人道的に説明を要する公正の大義大道なり、余先きに靈魂不滅論、勢力論等に於てはのかに之れを示したり、若し其れ其専門的高尙の議論に至りては余別に皇道新論と及び國粹保存歴史哲學等あり、他日又筆を討めて祖先崇拜論を記明して讀者諸君に見ねん、

本書を著述するに當り、思力と勞力とを以て余を助けたる人々を、相原冬吉、龜岡源次郎、岡崎勇吉の三氏とす記して以て之れを謝す



明治三十五年十二月十三日印刷
明治三十五年十二月十五日發行

定價金四拾錢

著者 西山安丸

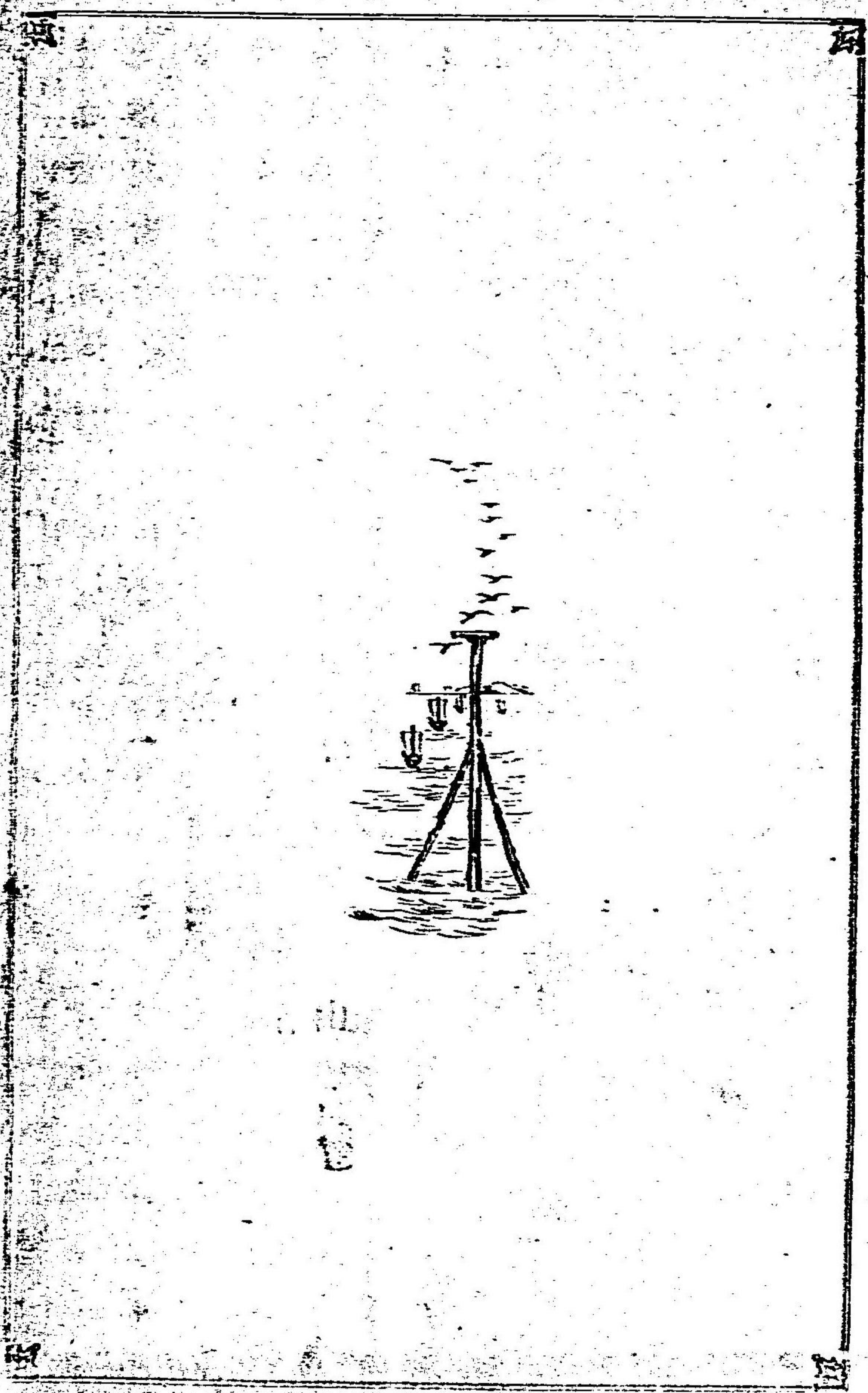
福島縣伊達郡伊達崎村
伊達崎圖書館內

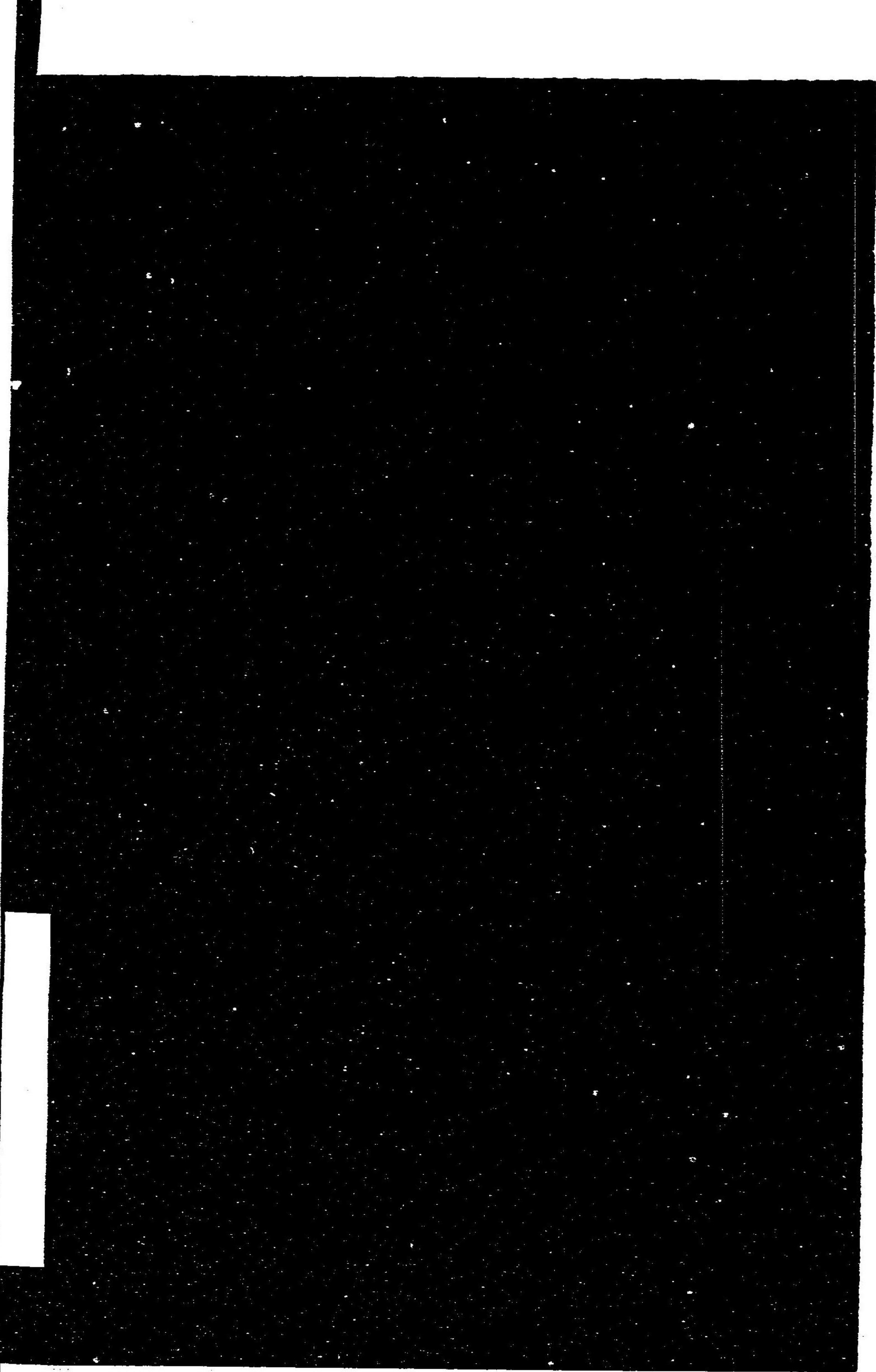
發行所 武田鷹之助

福島縣信夫郡福島町字
杉妻町拾參番地

印刷所 福島活版社

福島縣信夫郡福島町字
杉妻町拾參番地





[Redacted text]

特 49

297

青年読本

国立国会図書館

010763-000-6

特49-297

青年読本

西山 安丸/著

M35

AAE-2260

